

特集 3

# 馬の特性を活かして 障害のある人々の指導に 挑戦する

滝坂信一先生は、子どもの成長・発達、身体的・精神的なハンディキャップをもった人びとの教育やケアに関わる研究に約30年にわたって携わってきた。こうした中で、子どもの発達は決して直線的に進行するものではないことを解明した。さらに、馬を活用した療法の有効性をだれよりも早く認識し、日本での普及に尽力している第一人者である。自らの研究を語る滝坂先生の目はだれよりも優しく輝いていたことが印象的である。

## 子どもの成長は直線的ではありません

「私の専門は発達心理と臨床心理です。人間は生まれてからどのように成長していくのか、特に『<私>という意識はどう成立するか』ということに強い関心を持ってきました。具体的に言うと、自分のことを『太郎ちゃん』とか『花子ちゃん』というように自分の名前と呼んでいた小さな子が、やがて“ぼく”とか“わたし”と呼ぶように変わっていきます。また、鏡の前でポーズをとって自分の姿を気にするようになってくる、そんなことがどう成り立ってくるのかということなどです。これらは、人との関係や社会との関係の中で成立してくるものです。多くの子どもたちはいつの間にかこういったことができるようになりますが、一方でこういった対応をすることが難しい子どもたちがいます。つまり、障害のある子どもたちです。

また、子どもの発育や子育ての仕方について様々な不安や悩みをもつ親がいます。子どもに障害があるとわかったときその事態や見通しをどのようにもって子育てをしていったらよいかに立ち止まってしまう親がいます。こうした方々をどのように支援していくかということが



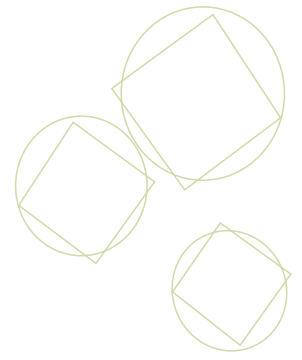
独立行政法人 国立特殊教育総合研究所  
滝坂 信一 総括主任研究官

ら臨床心理の研究に入っていました。」

先生は子どもの成長が直線的でないことを発見したと伺いましたが、どのようにしてこの事実を発見したのですか。なかなか、発見を証明できるような方法はないように思えるのですが。

## 吃音から学んだ 子どもの成長のプロセス

「私が研究対象としてきたのは、乳幼児、そして知的障害、重度の運動障害、自閉症といった障害のある人々で



す。私が明らかにしようとしてきたことは、次のようなものです。従来、人の発達、生後することができるとが加算的にどんどん増えていき、やがて少しずつできなくなっていくというように直線的なものと思われていました。しかし、そうではなくて2歳半～3歳くらいの時に非常に大きな質的転換の時期があるのではないかとすることに気づいたのです。きっかけとなったのは、『吃音』という現象です。人間が話し始めるのは1歳位です。しかし、吃音は文化や民族の差を越えて、2歳半～3歳で発生します。話し始めて2年間、人はどもることができないのです。この空白の2年間をどのように考えたらよいのか、先行研究に当たりましたがこの仕組みを取り上げた人も解明した人もいませんでした。この現象から、2歳半前後まではオウムのように反応して言葉を覚え、2歳半～3歳頃になると、『話す』ということの中で調整してから具体的な行為に移すという力が発生する。そしてこの力の発生によって初めて人はどもることができるようになるのです。」

戦後の日本では馬を飼う農家がほとんどいなくなり、競馬と一部の人びとが行う乗馬以外に、一般の人びとが馬と触れ合う機会はなくなりました。こうした中で、先生はどうして馬が障害をもった人びとの治療に有効であるという研究を行うようになったのですか。

### 乗馬療法から 馬の特性を活かした指導へ

「1988年、私は障害の重い人たちのコミュニケーションと身体の問題について、何人かの仲間と共にドイツの研究グループと共同研究を始めました。先方の共同研究者の1人が理学療法士で、馬を使ったリハビリテーショ

ンを行っていました。障害のある子どもたちの教育や心理的な対応に馬を活用するということについては、早くから耳にしていたのですが、うまくイメージできませんでした。しかし、1990年に彼女の実践を見たとき、障害のある子どもたちへの教育において自分が行おうとしてきた考え方や内容、方法が馬を用いることによって可能だという確信に似たものが持てたのです。そして旧知の調教師の協力を得、同年からこの取り組みを始めました。そして当初この領域を『乗馬療法』と呼んでいました。しかし、その後障害のある人が単に馬に乗ればそれが乗馬療法であるという考え方が一人歩きし始めました。このことは将来的に見たとき、質の高い実践や指導者・専門家の養成に支障をきたすことになるのではないかと考えるようになりました。そのため、現在では乗馬療法という言葉を使うことをやめ、私自身は『馬の特性を活かした指導』や『馬を使った心理的対応』といった表現をするよう心がけています。」

なぜ、馬を使った障害のある人への指導が有効なのでしょう。馬に乗るということは、障害者にとってどのような意味をもつのか、またその効果はどのようなところに現れてくるのか教えてください。

### 馬に体を預けることは、 自分の気持ちも預けることです

「馬を使った障害のある人へのアプローチは、①医療行為の一環として行われるもの、②心理・教育的な対応の一環として行われるもの、③スポーツやレクリエーションとして行われるもの、3つの領域に分けられています。国際的にはこの全体を『セラピューティック・ライディング』と呼んでおり、ホース・セラピーという言葉は使

馬の特性を活かした指導が今大きな注目を集めている



われません。

馬に乗ることの効果は、心理的な側面と、身体的な側面から説明することができます。心理的な側面では、まず、馬に乗るといことは馬に体を預けるということですね。そして、体を預けるということは同時に自分の気持ちを預けることなのです。つまり、馬に乗ることを通じて心と体を開くと言い換えても良いと思います。また、今まで人の手助けを受けることが多かった人びとが、馬を世話するという行為から受ける心理的な影響も大きいですね。身体的な側面では、馬の背中の中の筋肉は多方向に動きます。馬が歩行したときの背中の動きは、人間が自立歩行したときの骨盤の動きと同じです。この特徴を活用して体の不自由な人が日常生活の中で緊張させている筋肉をリラクゼーションし、適切な自立歩行の動きを学ぶことができるのです。

さて、日本では医療の領域で馬を使う仕組みがないことから、馬を使ったこのような治療は行われていません。心理・教育の領域やスポーツの領域でも、取り組みはまだ始まったばかりとあって良いでしょう。戦前、馬は人間の生活と密接な関わりを持って飼われていました。しかし、現代は80%が競走馬です。競走馬として品種が作られてきたサラブレッドやアラブなどはこの領域に向けた馬種とは言えません。今後この領域が発展・定着して

馬に体も心も預けて様々なことを学ぶ



いくためには、この領域に適した馬と調教が不可欠の要素となります。」

インタビュー前は、私自身も単に馬に乗ればいい療法なんて、特に研究する必要がないのではないかと考えていました。しかし、先生のお話を伺い、馬を使った障害のある人への対応は、非常に奥が深く科学的に興味深い研究領域であることを強く実感しました。最後に、これから滝坂先生が習得されてきたものをどのように学生に伝えようと考えているかを教えてください。

## 知・技・思いをもった学生を育てたい

「実践を大切にしたい学生が育ってほしいですね。実践できる人材になるためには、次の3つの基本を習得する必要があります。第1はきちんとした基礎知識をもつこと。第2は基本的なしっかりした技術をもつこと。そして第3は『思い』です。この『思い』とは、障害や心理的に課題をもつ人びとに対する優しさ、思い、そして動物に対する思いです。こうした3つの条件を備えた学生が育ってほしいと願っています。」

(聞き手：門間敬幸)